

デヴィッド・グレーバー著、酒井隆史監訳



山本 圭

債務者を道徳的な落後者として黙らせるシステムの一言がある。「借りた金は返さなければならぬ」「というのがそれだ。本書が挑戦するのはこの強固な「常識」にほがならない。とうして私たちが、借りた金を返さなければならぬのか？

本書は負債の正体をめぐる「借金の人類史」である。紀元前から現代まで駆け抜けるなかで示される情報はすさまじい。人類学の蓄積にもとづく数々の逸話では、たとえば万華鏡をのぞくように、負債がそのままなかたちをとって現れるだろう。

ローンや奨学金をはじめ、私たちは借金の話題に事欠かない。本書は借金を減らすためのノウハウ本ではない。しかしその主張は、国際的債務と消費者債務の帳消しというはるかにラディカルなものだ。この掟（きまり）やぶりの提案を不思議に感じる人もいるだろう。そのような人こそ、ぜひ本書を手にとってみてほしいと思う。

負債論

以文社、6480円